

## 世界遺産『ニース：リヴィエラの冬のリゾート都市』 ～画家アンリ・マティスを魅了した街～



昨年 2021 年の 7 月にコロナ禍の中、オンラインで第 44 回世界遺産委員会が開催されました。日本の『奄美大島、徳之島、沖縄北部及び西表島』と『北海道・北東北の縄文遺跡群』が世界遺産に登録されたのは記憶に新しいところです。

その際、南フランスの都市ニースが世界遺産に登録されたのもご存知でしょうか。『ニース：リヴィエラの冬のリゾート都市 (Nice, Winter Resort Town of the Riviera)』という名称で登録されました。コロナ禍前のニースには、世界中から観光客がこぞって押し寄せていました。このフランスきっての観光地ニースが「世界遺産」に登録されたのです。ニースは、日本人観光客に馴染み深い街ではありますが、意外と知らない方も多いのではないのでしょうか。ヨーロッパへのパッケージツアーがまだ本格的に再開されていないので、知る機会も少ないかと思えます。今回は、このニースについてご紹介します。

ニースの歴史を簡単に振り返ると、その歴史は古く、紀元前にギリシャ人により街が形成され、その後はローマ人に支配され、中世にはプロヴァンス王国に属するなど、数多の王国や公国の支配下に置かれました。立地も地中海に面し、イタリア、フランス、スペインなどの交易の要衝であったことなどからも、この街の重要性が窺えます。18 世紀以降になると、上流階級の保養地としての人気が徐々に高まり、19 世紀には、その名声が一気に高まり、リゾート地として人気を博すようになりました。それは、上流階級のみならず庶民にも広がり、やがて画家たちからも脚光を浴びるようになりました。オーギュスト・ルノワール、ピエール・ボナール、パブロ・ピカソ、マルク・シャガール、ニコラ・ド・スタール……そして、アンリ・マティス、多くの画家たちがニース周辺に移り住みました。パリからニースにスケッチ旅行に行くだけでなく、ニースに移住してしまったのです。ニースは、画家にとって、それほど魅力あふれる街なのです。

その中でも「アンリ・マティス (1869 年～1954 年)」をテーマに取り上げてみたいと思います。

マティスは、フランス北部ノール県に生まれ、ニースで没します。パリのアカデミー・ジュリアン（＝日本の美術予備校のような学校）で絵画の基礎を学び、20代では写実的な絵画も描いていました。マティスが20歳の頃は19世紀末。パリは、印象派から後期印象派へと移り行く時代でした。ポール・セザンヌやポール・ゴーギャンなど、「色彩」にインパクトのある後期印象派の画家たちが、頭角を現し始めました。マティスも彼らの影響を受け、作風も次第に「インパクトのある色彩」へと変化していきました。20世紀に入り「フォーヴィスム」と呼ばれる「強い色彩を放つ激しい画風」の画家たちが登場します。



アンリ・マティス

ジョルジュ・ルオー（1871年～1958年）やモーリス・ド・ヴラマンク（1876年～1958年）などがフォーヴィスムを代表する画家です。特にルオーは2つ年上のマティスを生涯にわたって慕い、友人としてお互いに影響を与え合ったことが知られています。マティスはフォーヴィスムの画家に分類されますが、フォーヴィスムの画家にしては、色彩が穏やかです。私は、マティスの作品はフォーヴィスムとは別物のように感じます。

マティス作品の通説的なイメージは、爽やか、穏やか、美しい、でしょうか。私は、「落ち着いた明るい感じ」が、イメージとして一番しっくりきます。なので、穏やかな色彩を好む日本人には、マティスの絵が好まれるのかもしれませんが。

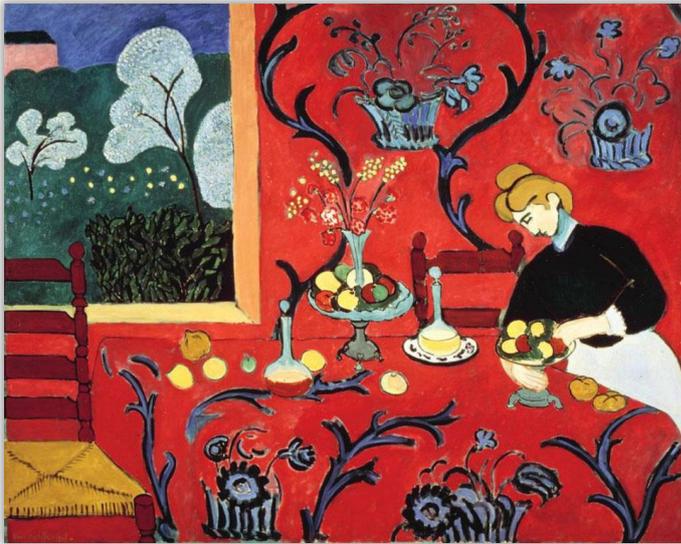
マティスの代表作をご覧ください。

まずは、『帽子の女（1905年）』ですが、私はこの作品にあまり良い印象を持ちません。なぜかというと、フォーヴィスムにしては薄い色調ですし、グリーンの配色バランスがバラバラになっています。それに対して、ルオーやヴラマンクの作品は濃い色調で、激しい色彩のトーンが合っています。マティスのこの作品は、「薄い色調で激しく」描かれているので、不自然な感じが否めません、要するに“合っていない”のです。おそらくマティス自身も、フォーヴィスムの流れに自分の作風が合っていないと気づいていた、と思います。その後、マティスの作風は、次第に「色彩の調和」へと変化していきます。画面上の色彩のバランスが変化していき、整ってきたのです。フォーヴィスムに合っていないことに気がついたことが、マティス独自の画風を生み出した分岐点だったと考えられます。



帽子の女

サンフランシスコ近代美術館



赤のハーモニー／エルミタージュ美術館



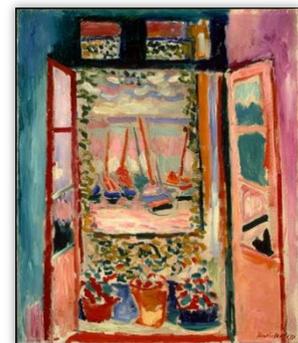
ダンス（Ⅰ）／ニューヨーク近代美術館



ダンス（Ⅱ）／エルミタージュ美術館

次に、『赤い部屋（1908年）』と『ダンスⅠ（1909年）』、『ダンスⅡ（1909年～10年）』です。それぞれの作品の各パーツを、他の色に置き換えてみてください。たとえば、赤い部屋を青色にしたら……、ダンスの踊っている人を黄色にしたら……、色彩のバランスが崩れてしまいませんか。マティスは、最適な配色バランスで描いていることが分かります。たびたび「色彩の魔術師」と称されるマティスですが、卓越した「配色コーディネーター」なのだと考えます。また、フォーヴィスム画家のルオーやヴラマンクには「他を圧倒する迫力のある作品」が多く、マティスには「色彩の調和から生み出される心地よい作品」が多いのです。そして、その計算された配色に、画家の知的さを感じるのは、私だけでしょうか。

なぜ、マティスの作品は多くの人に好まれるのか。その理由を示す代表的な作品があります。『空いた窓（1905年）』です。マティスの爽やかで「落ち着いた明るい感じの作品」のイメージを決定づけたのは、この「窓から見える海」の作風でしょう。地中海のイメージ、窓から流れる爽やかな風、そして、この部屋にいる自分……。想像するだけでも、とても心地良い気分になれるのです。マティスは、この作品を鑑賞者視線で描いています。一言で表現するなら、「部屋に飾りたくなる絵」。晩年の切り絵も、マティスのイメージを向上させた作品です。油彩画の作品と比較すると、シンプルで優しい感じがします。



空いた窓／ニューヨーク  
ホイットニーコレクション

ちょっと脱線しますが、私が画学生（高校生）の頃、美術学校の先生が生徒たちに「マティスの絵を“観”なさい」と言ったことを覚えています。彼らは皆、首を傾げました。美大受験を控えた画学生にとっては、対象物を見たまま忠実に写し取ることが先決で、抽象的なマティスの絵から何を学べば良いのか、理解のハードルが高かったのかもしれない

ん。先生が伝えたかったのは、“色彩のバランス”です。ただ正確に写し取るだけではダメ、ということ。色彩のトーンや配色、つまり、どこにどの色を置くと良いか、デッサン力がいくら長けていても、色彩感覚が伴わなければ、人を魅了する良い絵にはならない。その最たる手本として、先生が示されたのが、マティスの絵でした。



マティス美術館の外観

マティスは、ひとりの人間としても、多くの人々を惹きつけます。フォーヴィスムの画家は、感情の爆発のように囚われがちですが、マティスは常識的な物の考え方をする人だったそうです。マティスの作品は一見、抽象画のようです。しかし、理にかなった色彩で、鑑賞者が観やすいように描かれているので、マティスは理性的な人だったのではないかと私は思っています。マティスとよく比較さ

れるのが、ほぼ同時代に生きたピカソ（1881年～1973年）です。12歳年下のピカソは、マティスを慕っていました。「自由な作風」を目指すピカソにとって、同じ志を持つマティスは大きな道標のような存在でした。ピカソは強烈な存在感を示した画家でしたが、まるで正反対の穏やかなマティスと親密であったのは、興味深いことです。マティスと学生時代からの友人であったルオーは、若い頃、重厚で激しい作風だったので一見、荒々しい性格と考えられがちですが、とても繊細な性格だったそうです。マティスとの手紙のやり取りも多く、マティスはルオーにとって良き相談相手であったことが知られています。このように、ピカソにもルオーにも慕われたマティス。個性豊かな画家たちの中で、マティスはとても安定感のある人物だったのだと思います。

マティスは、40代後半から亡くなるまで、ニースで暮らしました。人生の約半分をニースで過ごしたことになると思います。ニースの至る所に、マティスゆかりの場所が在ります。旧市街にはマティスが住んでいた家が、ニース北部の高級住宅街で知られるシミエ地区にはマティス美術館が在ります。このマティス美術館には雑誌やインターネットではなかなかお目にかかれぬ作品もあり、マティス・ファンには必見です。ニースから北へ約20kmのヴァンスには、ステンドグラスの美しい「ロザリオ礼拝堂」が在ります。礼拝堂に差し込む光とブルーの色彩が見事に溶け込んでいて、訪れる者を神聖な気持ちにさせてくれます。

マティスは、終の棲家として、ニースの地を選びました。マティスに限らず、画家にとって、ニースは特別な街です。海、太陽、光と影、坂道、石畳、古い家並みなど、題材に事欠きません。無いのは、雪景色くらいです。ルノワール、ボナール、ピカソ、シャガール、ド・スタール……そして、マティス。世界的な画家たちをこれほどまでに魅了するニースは、世界遺産に値する街と言えるのではないのでしょうか。



ロザリオ聖堂

ニースの冬は「リヴィエラのリゾート」と称されるように、東京や大阪の11月下旬のような温暖な気候です。夏の猛暑は少なく、冬は、緯度は札幌とほぼ同じですが、地中海性気候の影響で暖かく、比較的過ごしやすい土地柄で、年間を通して観光を楽しめます。画家たちにとっては、パリとは異なり、1年中、冬でも、屋外で絵画の制作をすることができる街です。北はパリをはじめフランス各地から、西はアンダルシア地方やバルセロナから、東はイタリア半島から、南はコルシカ島やサルデーニャ島から、様々な人々や物資が交差する地点でもあります。登録基準(ii)を認められたことに、納得します。また、モナコやカンヌといった人気の観光都市(国家)も近くに在ります。ニースの冬の風物詩として、2月に世界的に有名なカーニバルが開催されます。夜に行われるので煌びやかですし、巨大な人形と美しく着飾った人々のパレードは圧巻です。

ちなみに、「リヴィエラ」とは、主にイタリア北西部のリグリア海に面した一帯を指し、ポルトフィーノからジェノヴァの周辺一帯の海岸線を言います。このリヴィエラの延長線上、西の端に在るのが、ニースです。ニースの海岸線自体は、主に砂利<sup>じり</sup>でできていて、ごつごつとした石もあり、砂浜のビーチではありません。



日本からニースへの直行便は就航していないので、ヨーロッパ内の都市を経由して行くことになります。パッケージツアーの場合は、航空機でニースに入ることが多いのですが、時間が許すなら、列車をお勧めします。パリからTGVでマルセイユまで約3時間。そこから内陸を抜け、海岸沿いを走る列車でカンヌを過ぎ、パリからニースまで約6時間の旅です。もうひとつのお勧めは、ミラノから乗車し、世界遺産の登録物件のあるジェノヴァを通り、国境駅で乗り換えます。リヴィエラ海岸沿いを、モナコ、ニースへと辿る約5時間の旅です。ニースからイタリア国境まで約30 kmで、

パリよりミラノの方が断然近く、イタリアからフランスへと変化していく街並みを観るのも楽しみです。いずれも、コート・ダジュールの美しい海岸沿いを眺めながらの、とても贅沢な旅となるでしょう。

ニースを含むこのコート・ダジュール一帯は、今でも芸術家たちを惹きつけ、現代アート作家のアトリエも多く、フランス国内ではパリに次いで画廊の多い地域です。特にサンポール・ド・ヴァンスは、画廊の街としても知られています。そして、このニースこそが、19世紀から絶えることなく、多くの画家たちが移り住み、現代でも「芸術家たちを惹きつける街」の中心地なのです。世界遺産としては、観光に特化した形で登録された珍しい例でもあります。ニースは、傑出した魅力にあふれ、今もなお、多くの人々を惹きつけてやみません。